

同時期に開催された注目の自動車関連展示会に

# 時代の新潮流を見る

## 運輸・交通システム EXPO2018 東京

## 2018 NEW 環境展 (N-EXPO 2018)

## 人とくるまのテクノロジー展 2018 横浜

本誌レポーター：岡 雅夫



今回は同時開催展と一緒にの会場での展示に戻った《運輸・交通システム EXPO》

### 《運輸・交通システムEXPO2018 東京》

2018年5月23日(水)～25日(金)、東京ビッグサイト西3・4ホールにおいて恒例となった運輸・交通システムEXPOが開催された。参加企業は47社と前回の50社より3社減ってはいるがほぼ同等の規模で開催され、その中に新規参加企業も数社見られた。昨年はビッグサイトの大規模改修工事の影響で同展示会は1階アトリウムでの展示となったが、今回は同時開催の「ワイヤレスジャパン2018 / ワイヤレスIoT EXPO2018」「ワイヤレス・テクノロジー・パーク2018」と同フロアで一体感ある展示に戻り、来場者も絶えることなく、ブース内では活発な商談が行われていた。セミナーも11種13回開催され、セミナー会場内は熱心な聴講者でほぼ満席状態であった。主催は、運輸・交通システムEXPO実行委員会で、会期中の来場者は54,423人(同時開催展を含む)となった。

ここで新規出展者をはじめとして注目される新提案を数件紹介していきたい。

まず「**J-BHEA / Smart Energy**」だが、電気商用車を積極的に導入する活動を行う福岡市のベンチャー企業で、これから本格参入すべく準備を進めている。生産は中国で行うが、部品は東芝など日本製部品を送り込んでいる。小型トラックから大型トラック・バスまで幅広い商用車バリエーションを計画している。ただし電気トラックはまだ国内インフラ整備が追い付かないため長期レンジで計画を進



小型から大型トラック・バスまで幅広いバリエーションを計画するJ-BHEA《運輸・交通システム EXPO》



J-BHEAの大型トラクタヘッド説明パネル《運輸・交通システム EXPO》

め、その前段階として中国製トラックを右ハンドルに改造して販売するという。価格メリットは大きく、大型トラクタヘッド(2軸)は900万円程度と国産同クラスと比較し3割以上安い。中国製エンジンでは困るというユーザーに対しては100万円アップで日野製エンジンに換装するという。九州地区で大型車業界としては新たな競争相手となるかもしれない。なお、トラクタヘッドのEV版の価格は非常に高く3倍の2700万円とのことである。ただし既に発電所の構内運搬用として受注しているとのことだ。

次に「**株式会社バスくる**」だが、大型観光バス用の左側ミラーが万が一破損したときに応急措置としてボルト3本で交換でき、そのまま運行を継続できる「ミラくる」を提案している。価格は7万円以下と比較的リーズナブルである。バスはミラーが破損したらその場で運行できなくなり、代わりのバ



バスくるが出展した「ミラくる」《運輸・交通システム EXPO》

スへの乗り換えなど損失も非常に大きくなるが、緊急スペアとなるミラーに簡単に交換することでそのまま暫く運行できるメリットは大きい。純正ミラーは一体で交換しなくてはならず価格も40万円を超える。「ミラくる」はJバス用とふそう用の2種が用意される。なお、いまのところ路線バスとトラック用は製作の予定は無いという。

次は「システム計画研究所」のAIによる運転中の通話及びスマホ操作行為検出機能である。リアルタイムではないが運転中のドライバーの動画をクラウドサーバで分析し、運行管理者がそれを確認するものである。乗務員教育や危険運転防止に役立つことが期待される。スマホ本体がドライブレコーダーに映っていない検知可能である。



システム計画研究所が出展した「ながらスマホ検出AI」(運輸・交通システム EXPO)

「株式会社三陽工業」が出展したのは透明フィルムで飛び石対策を行うもので、1枚数十万円から数百万円もする大型車のフロントガラスを保護するも



(株)三陽工業が出展した「クリアボックス」(運輸・交通システム EXPO)

のである。大型バスで13万円、大型トラックなら8万円という価格はガラスの交換費用を考えれば比較的リーズナブルと言えよう。保険制度の変更でこれまで等級据え置きだった保険によるガラス交換が出来なくなったことで走行距離の多いトラックやバスでの普及が見込まれるものである。

「リアライズコーポレーション」は日本初のトラックファンドによる大型トラックのオペレーティングリースを始めた。高価な大型トラックを車を自己資本とするファイナンスリースではなく、いつでも自由な期間借りることができ財務負担も減る新しいリース形式である。これまで大型トラックのリース車両残価の見極めが難しく実現しなかったこのリース方式はトラック売買のノウハウを熟知した企業が立ち上げることで初めて出来上がったものである。六本木ヒルズに本社を構える同社の今後が期待される。

「株式会社ナビタイムジャパン」は、日本初のトラック専用カーナビアプリを開発した。大型車を考慮したルート検索ができ、高さ、幅、重量、通行止めなどを検知し最適なルートを案内するものである。また、通行規制時刻や対象車種情報も確認できる。大型車の駐車可能施設検索、巡回経路、最適ルート、横づけ設定など細かい配慮が行き届いている。



ナビタイムジャパンのトラックカーナビ(運輸・交通システム EXPO)

「株式会社デンソーセールス」はクラウド型やドライブレコーダー搭載デジタコなど、富士通と提携して最新のデジタコを提案している。

「株式会社ドラEVER」はドライバーの求人サイトだが、この深刻な問題解決に取り組み、高齢化、



ドライバー求人サイトのドラEVER(運輸・交通システム EXPO)

離職率、応募減、給与、休日などを細かく分析して最適なマッチングを行えるような仕組み作りと効果を実現している。

「クラリオン株式会社」は毎回出展しているが、今回も入口前のベストポジションにブースを構え、最新のドライブレコーダーやウインカー操作で自動的に画像を映し出すカメラモニターなどを紹介した。



最新カーナビを展示するクラリオン(運輸・交通システム EXPO)

「株式会社データ・テック」は、バック事故を0にするドライブレコーダーと銘打って、うっかり事故を防止するシステムを組み入れた提案をしている。バックでの注意事項としてしっかりミラーを確認するには最低3秒が必要で、その時のドライバーの目の動きを感知し安全なバック走行につなげるもので、自動ブレーキ作動に連動したものではないが、ドライバー教育に役立てることができる。



バック事故を0にするドラレコを展示したデータ・テック(運輸・交通システム EXPO)

「株式会社フルバック」は、ドライバー採用によく効く働き方改革の処方箋という提案をしており、処方箋を配る看護師姿の女性説明員のコスチュームは視線を集めていたが、内容は当然ながらいたって真面目なものである。



ドライバー採用の提案をする(株)フルバック(運輸・交通システム EXPO)



先般、5月10日から12日までパシフィコ横浜でジャパントラックショーが開催されたが、部品・サービス・ソフトウェアなどの部分で運輸・交通システムEXPOと出展コンセプトが重なる部分があるのかどうか興味があったが、実際に双方の展示会に出展した会社は9社にとどまっていた。どちらも商用車を意識した展示ではあるが、運輸・交通の方が乗用車を含めたクルマシステム全体のイメージでの展示が考えられているように思える部分もあり、今後とも共存共栄できる場所は大きいと思われる。

《2018 NEW 環境展(N-EXPO 2018)》

運輸・交通システム EXPO とほぼ同会期で同じ東京ビッグサイト東ホールで日報ビジネスが主催する「2018 NEW 環境展(N-EXPO 2018)」が開催されており、こちらには環境をコンセプトとした商用車がいくつか展示されていたので主なものを紹介したい。

まずは松山市の「株式会社上陣」である。1995年から欧州のトレーラを輸入し高い運搬効率を提供している。今回は迫力ある3軸ダンプトレーラをメイン展示していたが、初めてディスクブレーキを採用して安定した制動力と軽量化を実現している。UDトラックの大型車クオンがディスクブレーキを標準採用したことに準じてトレーラ側もディスク化することでマッチングを図ったと言える。この3軸ダンプトレーラは最大積載量28tだが、2軸で25tのトレーラは連結全長10mと旋



新環境展の「上陣」ブース。最新のダンプトレーラなどを展示《NEW 環境展》

回性能に優れている。

「極東開発」「モリタエコノス」「新明和工業」「富士車両」はいずれも最新のタウンパッカーを展示していた。いずれもリヤスタイルが洗練され機能と同時にデザインがスマートになっている。また新明和



極東開発の小型ゴミ収集車《NEW 環境展》



新明和工業の小型ゴミ収集車《NEW 環境展》



新明和工業の準中型免許対応アムロール車《NEW 環境展》

工業には新たに従来4トンシャシーで運んでいたアムロールバスケットを小型ベースの3.5トン車で運べるようにして準中型免許での稼働ができるようにした新型アムロールが紹介されていた。



モリタエコノスの小型ゴミ収集車《NEW 環境展》

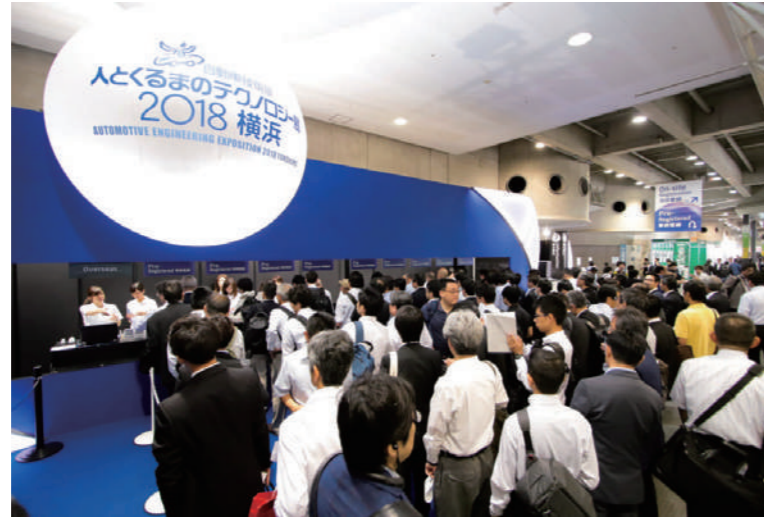


富士車両の中型ゴミ収集車《NEW 環境展》



《人とくるまのテクノロジー展2018 横浜》

さらに、運輸・交通システム EXPO と同会期(5月23日～25日)にパシフィコ横浜で開催された「人とくるまのテクノロジー展 2018 横浜」も紹介したい。



来場者で賑わう来場者受付  
《人とくるまのテクノロジー展》

【いすゞ自動車】は大型車のエンジンと AMT ミッションのカットモデルを展示したが、今や大型4社の AMT は全て前進12速、後退2速となっており、それも全てメイン3速の前後に副変速機を付けた設計となっている。ミッションの前後長を短縮させるための手法だろうが、これで12速とマニュアル7速の前後長はほぼ同じだと言う。偶然4社とも同じ設計になったのかどうか不明だが、共同開発は行っていないというから不思議なものである。



テクノロジー展のいすゞブース《人とくるまのテクノロジー展》

こちらは出展社数 597 社 1207 小間と大きく、毎年その規模は拡大し来場者も増え続けている。今年はメーカー系の展示面積が従来より縮小され、特に大型車メーカーは実車展示が困難になりエンジン・ユニット・カットボディなどが並べられた。同展の主催は公益社団法人自動車技術会で、会期中の来場者は3日間で93,458人を記録している。

【UDトラックス】はキャブのカットモデルとこの秋に大型車クオンに新たに搭載する新エンジン GH8 を参考出品した。他社のダウンサイジングに追い付いて競争力を高める作戦だが出力や燃費についてはまだ公表できないという。また電気トラックの開発についてもパネルで触れていた。



UDトラックス・クオンに搭載されるダウンサイジング GH8 エンジン  
《人とくるまのテクノロジー展》

【日野自動車】は電気小型トラックコンセプトモックアップと大型車エンジンを展示した。いすゞとふそうが小型EVトラックを本格的に納入し始めたことから、日野も当然追従していくとの意思の表れである。自動運転についてもようやくパネルで紹介するようになった。



日野プロフィアの赤いエンジン《人とくるまのテクノロジー展》

今回ふそうは残念ながら出展していなかった。自動車メーカーで唯一出展していない理由は何なのか不明だがジャバントラックショーにも初出展したのだから何かしら出して頂きたかった。

トヨタはFCEVミライ、ホンダはN-BOX、マツダはアテンザのそれぞれカットモデルを展示した。日産はリーフ、三菱はエクリプスクロス、スバルは新型フォレスター、ダイハツはタント、スズキはスペーシアのそれぞれ実車展示を行った。一つだけ興



ZMPのキャリロデリバリー《人とくるまのテクノロジー展》

味を引いた物流機器として、ロボットタクシー開発で有名になった ZMP 社が新たに開発した CarriRo Delivery (キャリロデリバリー)と呼ぶ日本初の宅配ロボットがある。物流ラストワンマイルの無人化を目指したボックス型車両で宅配、集配、見回りなどでの活躍が期待される。既に宅配すし、森ビルオフィスデリバリー、日本郵便、ローソンなどで実証実験が行われている。

2階エントランス付近では学生デザインコンテスト優秀作が掲示されていた。毎回行われているようだが頭の柔らかいユニークな作品は見るだけで刺激になる。車の歴史を振り返る展示だけでなく夢のある展示を今後とも期待したいものである。



テクノロジー展の学生デザインブース《人とくるまのテクノロジー展》

今回は1階のエントランス通路もフルに展示小間として活用していたがスペース的にはそろそろ限界だと考えられる。休憩スペースも取れない状況から考えると次回はローディングスペースに仮設館でも考えるのだろうか。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

以上3つの展示会はB2Bの商談を目的としたものであるが、テクノロジー展がややB2C的な来場者が増えているように思える。全体としてみるといずれの展示会とも出展社、来場者とも活性化していることが感じられる。ジャバントラックショーも成功裏に終了したが、自分のブースで何を売り込むかが明確なところが増えて、それが来場者の期待に応えるような展示が増えていると筆者は感じているがいかがだろうか。